

「三項関係情動」の生起メカニズムを探る

—共感的喜び・妬みの状況要因について—

山 本（西隅） 良 子

問 題

我々は、日常生活の中で、自らは全く知らない人でもその人に宝くじに当たるなどの良い出来事が起こったとき、その他者の幸福を喜んだり、また、妬ましく思ったり、その時々状況によって複雑に様々な情動を経験している。なぜ、このように他者に起こった出来事が自分自身に直接関係がない場合でも様々な情動を経験するのだろうか。果たしてこのような情動の特質や強度およびそれらを規定する要因や発生メカニズムなどについて、現代の心理学においてはどこまで明らかにされているのだろうか。

これまでの情動研究

従来の情動研究を概観するとき、その研究対象はもっぱら、個体自らの利害関心に関係する事象においてのみ人に経験される「当事者」の情動がほとんどである。例えば、近年、比較行動学や進化生物学の発展による本能論の再評価で支持されるようになった理論に、基本的情動理論がある。基本的情動理論とは、もともと、ある生物個体が生存していく上で必要なために、進化の過程を経て残ってきたものと考えられており、怒り、喜び、驚き、恐れ、悲しみ、嫌悪（Ekman, 1992）といった最も基礎的な情動を人間が持っているという考えである。基本的情動は、ある事柄が自己にとって有益なのかまたは有害なのかを瞬時に判断し、接近するのかまたは回避するのかといった、その個体が次にとるべき適切な行動を導く役割を担っているものであり、つまりは何らかの出来事の自分自身にとっての利害に応じて生じる一過性の心身反応である。それは、自己が直接関連した出来事にのみ生じる情動、いわばその出来事に「当事者」として関わるときに経験される「当事者情動」ということが出来るだろう。また、情動の生起メカニズムに関する現代の代表的な理論に「認知的評価理論」というものがあるが、そこでは、個体が遭遇した事象が、その個体の損得の観点から判断され、その個体の損得に少しでも関わりそうなものであれば何らかの情動が生起し、そうでなければ情動は生起しないと仮定される。確かに喜び、怒り、悲しみといった私たちが日常多く経験する基本的な情動を考える場合、その仮定は決して的はずれなものではない。そしてまた、その仮定は、各種の情動を個体の生物学的あるいは社会的適応を迅速にまた高度に保証する心理行動的システムであるとする、近年の合理的な情動観に合致するものといえる。しかし、我々が自らに直接関係する事象だけではなく、自らとは関係のない事象、例えば、他者に起こった事象についても、なんらかの情動を経験するという事は日常において経験されることである。だが、自らに絡まない事象において人が第三者として経験するよう

な「非当事者」の情動についての研究はほとんど行われてきていない。

もちろん、必ずしもこうした「今ここでの利害」に絡むものばかりではない、より複雑な情動も研究のターゲットになっていることは確かである。とりわけ、自己と他者との関係性や他者の目に映る自己の姿などについての複雑な意識が絡む、いわゆる自己意識的情動 (self-conscious emotion) などは、多くの研究者が高い関心を寄せるところである。しかし、こうした自己意識的情動にしても、他者との関係の維持や向上などが、結局本人自らの利害に関係している点では同じであり、やはりそこで問題にされるのは、結局のところ「当事者」の情動ということが出来る。

このようにこれまでの心理学における情動研究では、「当事者情動」とでもいうべき自らの利害に深く関係する出来事に対して生起する情動のみが、主たる研究対象として取り上げられてきたことがわかる。しかし、我々が日常生活において経験する情動は当然こればかりではない。冒頭で挙げた宝くじの例のように、我々は自分自身の利害に直接絡まない他者に生じた出来事についても、時に様々な情動を経験し得ると言えるだろう。しかし、こうしたいわば「非当事者」が経験する情動に関しては、これまでの心理学の中であまり検討されていないというのが実情なのである。

「非当事者」の情動

上述したように、これまで多くの情動研究が行われてきてはいるが、その主たる対象は、個体自らの利害関心に直接絡む「当事者」の情動であった。換言するならば、これまでの情動研究は「事象 (e)」と「事象の直接経験者 (x)」との“二項”関係の性質によって、xの情動の生起の有無およびその種類や性質が規定されるという側面に主たる関心を払ってきたといえるのである。しかし、筆者が本研究において問題にしようとする「非当事者」が経験する情動とは、「事象 (e)」 「事象の直接経験者 (x)」そしてその「事象には直接関係しない第三者 (y)」という、いわば“三項”関係の中で生じるものである。すなわちeがxに降りかかったことによって生じるyの情動経験に焦点を当てようとするのである。そうした意味で、こうした非当事者が経験する情動をここではあえて「三項関係情動」と呼ぶことにしたい (図1参照)。

もっとも、こうした三項関係情動を理解するための理論的手がかりが、これまでの心理学の諸知見の中に全く見出せないというわけでもない。例えば、三項関係情動そのものに関心を寄せ、それを実証的に吟味しているわけでは必ずしもないが、それに潜在的に深く関わり得る重要な理論枠として、社会心理学における「社会的比較理論」が挙げることができる。

社会的比較理論の中でも、とりわけ、本研究で問題にする三項関係情動にきわめて示唆的な理論モデルにSmith (2000) の研究がある。Smithは、人が社会的比較によって、時に非常に強い情動を経験し得ること、また、その比較が上方比較か下方比較かによって、経験される情動の種類や性質が大きく異なり得ることを示している。さらに、上方、下方のいずれの比較においても正負両方の感情が経験され得ることを述べ、比較が下方か上方かということと、そこで経験される情動が他者の心的状態に同化的 (他者の情動と同質の情動) か、あるいは対比的 (他者の情動とは対極をなす情動) かということの組み合わせによって、“下方同化的情動 (downward assimilative emotions)”, “下方対比的情動 (downward contrastive emotions)”, “上方対比的情動

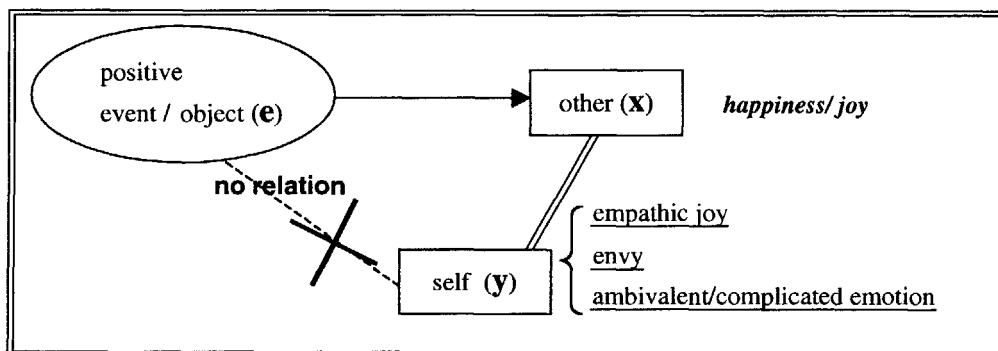


図1 三項関係情動とは

(upward contrastive emotions)”, “上方同化的情動 (upward assimilative emotions)” という4タイプの情動が存在し得ることを仮定している。

実のところ、この4タイプの情動はそれぞれ三項関係情動の中の、特に中核的な情動に対応しているものと考えられる。より具体的にいえば、“下方同化的情動”に対応する情動は、他者にネガティブな事象が生じた際にその周りに位置する個体が覚える代理的な苦痛の経験である、共感 (empathy) あるいは共感的苦痛 (empathic distress) であると言えよう。一方、“下方対比的情動”に対応するのは、他者が何らかの辛い状況にある場合の「いい気味」といった、ある種の喜びにも似た快感情、すなわちシャーデンフロイデ (schadenfreude) ということになろう。また、“上方対比的情動”に対応する情動は、賞をもらう、昇進するなど、他者にポジティブな事象が生じた際に、それを見聞きした個人が覚える相対的にネガティブな情動、すなわち妬み (envy) であると言えるだろう。最後に、“上方同化的情動”に対応する情動は、他者が良い状況にある場合に、その他者の幸せを自分自身のことのように他者と共に喜ぶ「共感的喜び (empathic joy)」とでもいうべき情動ということになるだろう (Smith自身は“上方同化的情動”の代表的なものとして、「賞賛 admiration」とともに、共感的喜びとよく似たインスピレーション・感激 (inspiration) という情動を挙げている)。図2には、他者に起こったのが良い出来事か悪い出来事かという軸と、その時、それに接した個人が経験する情動が、他者が経験するであろう情動と同化的な情動か対比的情動かという軸を直交的に組み合わせる形で、上述した4つの代表的な三項関係情動を配置してある。

これら4つの三項関係情動のうち、これまで最も多くの関心が寄せられ研究が進められてきたのは、共感あるいは共感的苦痛であり、また、ほとんど研究されてこなかったのは共感的喜びやシャーデンフロイデと言えるだろう。これまでの情動研究を概観するとき、「三項関係情動」の中でも、共感あるいは共感的苦痛以外の情動についての研究は相対的に稀少であり (もっとも妬みについては最近、嫉妬という情動との関連で部分的に取り上げられてきてはいるが)、特に「シャーデンフロイデ」や「共感的喜び」に相当する情動を実証的心理学研究の枠内に見出すことはほとんど出来ない。さらに、他者に正負いずれかの事象が生じたという同様の状況にありながら、ある時は共感的苦痛のある時はシャーデンフロイデを、またある時は共感的喜びのある時

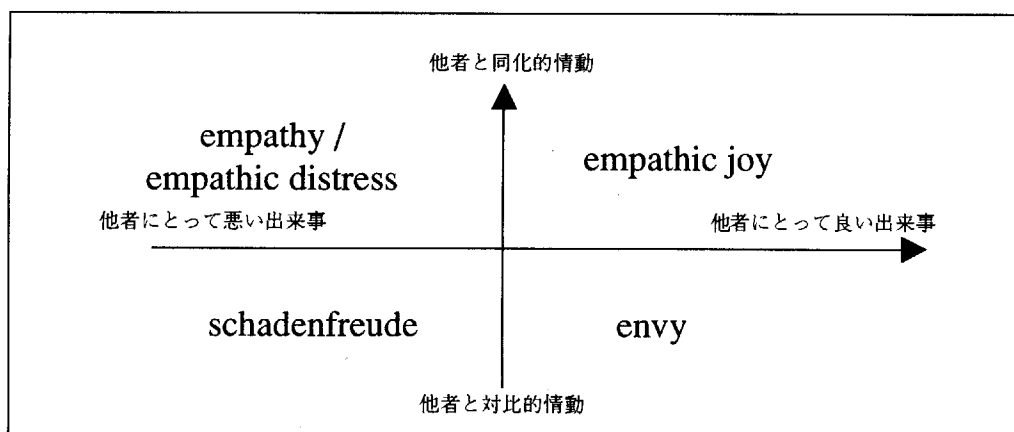


図2 4タイプの三項関係情動

は妬みを覚えることがあるわけであるが、それはどのような要因によって分岐するのか、全体的なメカニズムが既成の情動理論からはいっこうに見えてこないのが現状である。こうした情動に関して理論的枠付けを作ることが、今後の情動研究全般に新たな地平を拓き得るだろうと筆者は考える。むしろ、本来であれば、こうした代表的な三項関係情動のすべてを取り上げて論じるべきであるが、筆者はその第一段階として、まずは本研究において、先に述べた潜在に上方比較が生じ得る状況、すなわち他者に何か良い出来事が起きるというポジティブな状況に限定し、その状況下で「非当事者」が経験し得る「共感的喜び」と「妬み」の諸特質と、それらの情動を分け得る規定要因について探索的に明らかにしたいと考える。

妬み (envy) と共感的喜び (empathic joy)

「妬み」と「共感的喜び」は、他者に何か良い出来事が起きるという同じ状況において経験される、相反する情動と考えられる。それではなぜ同じ状況下にあるのに、人はある時は他者の身に起こった幸福を共に喜び、またある時は他者の幸福を妬むといった全く異なった情動経験をするのだろうか。その理由として、一つには、人が独自に持つ人格傾向やその人がそれまで受けてきた被養育経験の質、また、その被養育経験や様々な個人的な経験を通して身につけた全般的な感情傾向など、その個人が独自に有する種々の特性要因が考えられる。また、他者に良い出来事が起こった場面を構成する様々な状況的な要因も、個人内の特性要因と同様に経験される情動に様々な形で影響を及ぼすものと考えられる。人がある人格を持ち、ある程度一定した感情傾向をもちながらも、やはり一緒にいる他者がどのような存在であるかまたその他者にいかなる出来事が生じたかなど種々の状況要因により、そこで経験される情動は大きく異なることが想定される。

本来であれば、こうした個人の特性要因と状況要因の両者を取り上げ、検討を施していくべきところであるが、それら全てを網羅的に吟味しようとするとは極めて膨大な研究計画となるため、本研究においてはまず、「妬み」と「共感的喜び」の発生に関わる状況要因に絞り込み、その詳細について解明していくことにしたい。

それではこうした状況要因としていかなるものが想定されるだろうか。もちろん先述したようにこれらの情動を実証的に検討した研究は極めて少なく、先行研究の中にその直接的ヒントを見出すことはできないわけであるが、先のSmith（2000）のモデルを始め、これらの情動に潜在的に関わり得る理論枠を参考にしながら、以下では、仮説的に関与が想定されるいくつかの要因について考えておきたい。図1で三項関係情動が発生する場について簡単に見たわけであるが、そこからすると、非当事者が経験する情動に影響を及ぼし得る状況要因としては、“自己と他者との関係性の性質に絡むもの”と、“出来事の性質に絡むもの”との大きく二種のものを仮定することができると考えられる。

I 自己と他者との関係性にまつわる要因

「共感的喜び」と「妬み」の発生に関わると予測される、自己と他者との関係性にまつわる要因として、筆者はまず、他者との立場関係や親密度に着目する。人は関わる他者すべてに対して、全く同一の関係性を持っていることはない。他者が誰なのか、自分といかなる関係にある人物なのかということにより、好意や尊敬や嫌悪など他者について比較的持続的に有する対人感情の内容は異なっている。情動とは人の感情経験の中でも急激に生じ短時間で終わる比較的強い感情のことをいうが、人は、持続的で一貫した対人感情を持った上で何らかの出来事が起こった際に一過性の情動を経験するものと思われる（e.g. Izard, 1991）。したがって、もともとその他者とのような関係性にあるのかということが、経験される情動に強く影響することが予測出来る。また、これまで人間関係と情動の関連を指摘した研究は多くなされてきている。例えばHeider（1958）は、二者あるいは三者の対人間の感情について感情のバランス理論を考え出し、対人場面における個人の心理的過程を認知と感情のバランスという視点から捉え、インバランス状態はバランス状態へ移行する力を誘発する傾向を持つとして、対人関係における心理的変化や行動の変化を説明した。この理論からも他者との立場関係や親密さの程度により、こうしたバランスが微妙に影響を受け、他者の幸福を喜んだり妬んだりするというように経験される情動に影響があることが想定される。

次にやはりHeiderのバランス理論との関連において、自己と他者との関係性にまつわる要因として、他者に良い出来事が起こる以前の他者および自分の幸福状態、また両者の幸福状態のバランスの関与を想定した。もともと個人がどのような状態にあるかによってその後の情動反応や行動に影響があることは、これまでの研究においても指摘されてきている。人が元々どのような状態にあったのか、特にここでは、その後他者に良い出来事が起こって幸福な状態になるということから、人が元々それに先行してどの程度幸福なまたは不幸な状態にあったのかということが、その後の他者の幸福事態に対する情動に影響することが予測できるだろう。

II 出来事にまつわる要因

「共感的喜び」と「妬み」の発生に関与する出来事の性質にまつわる要因として、筆者は、他者に起こった良い出来事そのものが、もともと自己にとっていかなる意味を持つものかという要因を想定する。Smith（2000）のモデルで見たように、共感的喜びも妬みも基本的には他者との上方比較によって生じるものである。そして社会的比較過程において強い情動が生じる際には、比較の対象となっているものが、元来、個人の大切な目標や標準に直接関連していることが示されている（Tesser, 1991）。こうしたことからすると、他者に起こった出来事が自己にとってどの

ような意味を持つかという要因も、こうした三項関係情動の質を分ける重要な要因の一つと考えられよう。

以上、「共感的喜び」と「妬み」の発生に関わり得る状況要因を、自己と他者との関係性および出来事そのものの特質という二種に分けて考えてきた。しかし、ここで強調すべきことは、これらの要因はあくまでも仮説的に想定されるものに過ぎず、これまでのいかなる研究においてもいまだ体系的な形では明らかにされていないものだという点である。また、非当事者が経験する共感的喜びや妬みの経験には、ここで想定した以外の状況要因の関与も可能性として当然考えられるだろう。こうしたことを踏まえた上で、筆者は、本研究において、まずは共感的喜びや妬みといった情動について、その実態を明らかにすることから研究を始めていきたいと考える。

本研究では、日常生活の中で身近な他者に良い出来事が起こったときに、共感的喜びと妬みといった情動が実際に経験されているのか、また、それは誰に対して、いかなる出来事が起こったときに、どのような気持ちをもって経験されるのかについてその実態を把握すること、さらに、身近な他者に良い出来事が起こった際に経験される共感的喜びと妬みがそれぞれどのような他者および出来事に対して生じるのかを明らかにするため、他者と自己との関係性と出来事そのものから想定された要因が経験される情動に関与するのか、また、いかに関与するのかを性差も含めて調査することを目的とした。

方 法

対象

対象は、関西圏の大学生、大学院生および専門学校生348名（男性172名、女性176名）である。対象者の平均年齢は19.8歳（SD 1.76, range:18-25）であった。

調査実施時期と手続き

2002年10月～12月に、調査者や調査者から依頼を受けた教員が授業時間内に質問紙を配布し、集団で質問紙に回答させ、回収した。

質問紙の内容

質問紙では、まず、実態把握のために、回答者の身近にいる他者が良いものを手に入れたり、すばらしい賞を得たというように、良い出来事が起こったとき、回答者自身が共感的喜びや妬み、さらに共感的喜びと妬みが入り混じったような複雑な情動のそれぞれを実際に経験したときのエピソードを一つずつ思い浮かべてもらい、それぞれについて次のような質問をした。①良い出来事が起こった他者が誰だったのか ②他者にどのような良い出来事が起こったのか ③そのとき自己（回答者）が経験した情動とはどのようなものだったのか 各問いについて自由記述で回答させた。

さらに、自己と他者との関係性と出来事そのものから想定された要因のうち、他者との立場関係、他者との親密度、出来事が起こる以前の他者および自己の幸福状態、他者に起こった出来事の自己にとっての意味といった要因が経験される情動にいかに影響するかをみるために、それぞ

れの要因について、共感的喜びなどそれぞれのエピソード当時に当てはまるものを問うた。①他者と自己との立場関係（「かなり目上」から「かなり目下」まで5件法） ②他者との親密度（「とても親しい」から「親しくない」まで5件法） ③他者に良い出来事が起こる以前の他者および自己の幸福状態の程度（「不幸な状態」から「幸福な状態」まで5件法） ④他者に起こった良い出来事が自己にとって持っていた意味（「自分に起こって欲しいと強く望んでいた出来事」から「自分とは全く関係のない出来事」まで5件法）。

質問紙では、「共感的喜び」という表現は回答者にとって耳慣れないものであると考えられたので、代わりに「嬉しい気持ちや良い気持ち」という表現を用い、他者に良い出来事が起こった際に経験したポジティブ情動全般について問うた。また、「妬み」という表現は、回答者に社会的望ましさを意識させ、エピソードの記述に抵抗感をもたらすと予想されたため、「不愉快な気持ちや嫌な気持ち」という表現を用い、他者に良い出来事が起こった際に経験したネガティブ情動全般について問うた。さらに、共感的喜びと妬みが入り混じったような複雑な情動については、「嬉しくなるような良い気持ちと不愉快になるような嫌な気持ちが入り混じった複雑な気持ち」と表現した。フェイスシートでは、年齢、性別、きょうだい構成を聞いた。

結 果

調査の結果、他者に良い出来事が起こったときに経験された3つの気持ちについての回答をみると、通常経験されると考えられる「良い気持ち」だけではなく、「嫌な気持ち」や「複雑な気持ち」についての記述もみられ、さらに「嫌な気持ち」や「複雑な気持ち」についての記述において異種多様のものがみられた。他者に良い出来事が起こったとき、何をどうみるかについての解釈によって、経験される情動に数種類のものがあることがわかった。また、それぞれの気持ちが経験された状況や、経験された気持ちの詳細について実態が明らかにされた。

3つの気持ちで挙げられた他者

3ついずれの気持ちを経験したエピソードについても、そのエピソードに登場する良い出来事が起こった他者として「友人」を挙げるものが最も多かった（他者として「友人」を挙げた回答率、「良い気持ち」65%、「嫌な気持ち」53%、「複雑な気持ち」52%）。

他者に起こった良い出来事

他者に起こった良い出来事として挙げられた全ての出来事を内容によって9カテゴリーに分け、そのいずれにも該当しないものは「その他」とした。図3は、それぞれの気持ちが経験されたときに挙げられた出来事についての回答者全体での分布を示したものである。その結果、「良い気持ち」を経験した場合の出来事として、大学受験・資格試験などへの「合格」が最も多く、次に部活動などでの「活躍・受賞・選抜」が多かった。「嫌な気持ち」においては、「活躍・受賞・選抜」が最も多く、次に「合格」が多かった。「複雑な気持ち」では、他者の恋愛が成就するといった「恋人」が最も多かった。いずれの気持ちにおいても出来事の分布に性差はなかった。

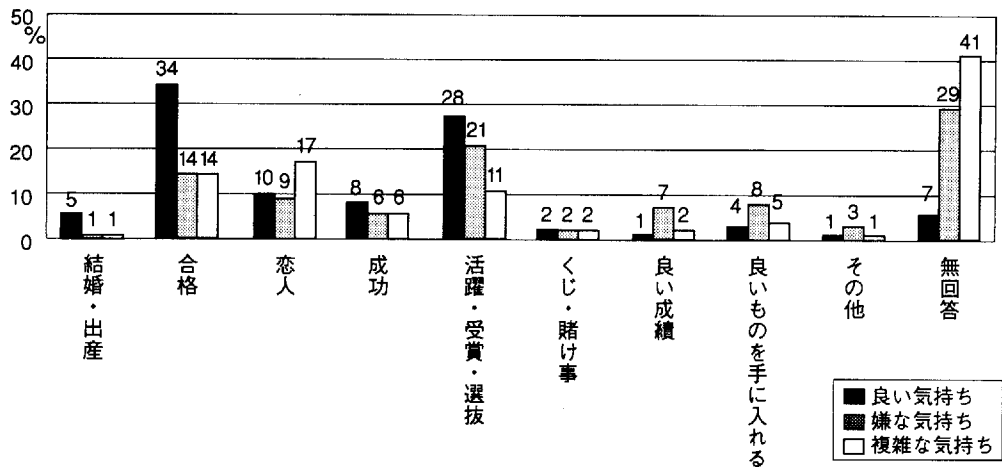


図3 それぞれの気持ちを経験したときに挙げられた出来事の分布 (y軸の単位は%)

経験された3つの気持ちの内容

経験された気持ちがどのようなものであったか、詳細について自由記述回答からその全体像をとらえた。得られた回答を3つの気持ちそれぞれにおいてカテゴリーに分けた(表1参照)。表1から、他者に良い出来事が起こったときに経験された良い気持ちにおいて「共感的喜び」に対応する気持ちが、実際に人々に経験されていることが明らかになった。「嫌な気持ち」では「悔しい」が回答の多くを占めた。「悔しい」「腹立たしい」といった形容詞は、今までの感情研究に当てはめて考えてみるならば、どれも妬み感情に相当するものである。経験された情動のどういう側面に着目するかによって違った形容詞が出てくるのであり、その中核にある感情として「妬み」が存在するということは共通すると考えられるので、これらの表現も妬みとして捉えることとした。

表1 経験された3つの気持ちについて (() 内は回答数, 上から回答数の多いカテゴリー順)

良い気持ち	嫌な気持ち	複雑な気持ち
自分のことのように嬉しい気持ち(203)	悔しい(90)	嬉しい気持ちと悔しい気持ち(109)
尊敬(24)	腹立たしい(35)	嬉しい気持ちと寂しい気持ち(32)
安心(13)	納得がいかない(25)	嬉しい気持ちと腹立たしい気持ち(23)
誇らしさ(12)	悪意のあるうらやましい(15)	
自分も頑張ろう(12)	妬ましい(6)	
賞賛(10)	次は自分だ(5)	

次に、他者に良い出来事が起こったときに経験された共感的喜びと妬みが、どのような他者および出来事に対して生じたかを明らかにするため、他者と自己との関係性と出来事そのものから想定された各要因が経験される情動に関与するのか、また、いかに関与するのかを明らかにした。

各分散分析結果の前に、表2に、得られた回答の代表値として平均値と標準偏差の値を載せた。

表2 回答の平均値と標準偏差(値が大きいほど、目上・親密・幸福・出来事の意味が自己にとって重要であることを示す)

	良い気持ち		嫌な気持ち		複雑な気持ち	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
立場関係	0.69	3.17	0.64	2.94	0.55	3.01
親密度	0.87	4.50	1.38	3.39	0.95	4.20
出来事の意味	1.60	3.25	1.30	4.09	1.32	4.00
他者幸福	1.35	3.37	1.31	3.77	1.27	3.45
自己幸福	1.06	3.25	1.18	2.73	1.01	2.87

他者との立場関係

回答者の性別と「良い気持ち」をはじめ3つの気持ちを独立変数とし、立場関係を従属変数として、被験者間要因と被験者内要因を含む2元配置の分散分析を行った。その結果、3つの気持ちに主効果がみられ、経験された3つの気持ちと、他者との立場関係が関連していることが明らかになった ($F(2,189) = 7.10, p < .01$)。TukeyのHSD検定における多重比較の結果(表3参照)を検討したところ、他者に良い出来事が起こったとき「良い気持ち」は他者が目上である場合に経験されることが多いが、「嫌な気持ち」は他者が対等や目下である場合に、また「複雑な気持ち」は他者が対等である場合に経験されることが多いことが明らかとなった。

表3 多重比較結果(値が大きいほど、目上・親密・幸福・出来事の意味が自己にとって重要であること、「他者幸福－自己幸福」は他者が幸福であることを示す * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$)

		立場関係	親密度	他者の幸福	自己の幸福	他者幸福－自己幸福	出来事の意味
良い気持ち	嫌な気持ち	.23***	1.10***	-.28**	.53***	-.78***	-.84***
	複雑な気持ち	.16*	.30**	-.16	.35***	-.47***	-.75***
嫌な気持ち	良い気持ち	-.23***	-1.10***	.28**	-.53***	.78***	.84***
	複雑な気持ち	-.07	-.80***	.12	-.18	.31*	.09
複雑な気持ち	良い気持ち	-.16*	-.30**	.16	-.35***	.47***	.75***
	嫌な気持ち	.07	.80***	-.12	.18	-.31*	-.09

他者との親密度

回答者の性別と3つの気持ちを独立変数とし、他者と自己との親密度を従属変数として分散分析を行った結果、3つの気持ちに主効果が見られ、経験された3つの気持ちによって、自己と他者との親しさの程度に違いがみられることが示された ($F(2,188) = 55.22, p < .001$)。同様の多重

比較の結果（表3参照）より、「嫌な気持ち」より「良い気持ち」を経験したエピソードを思い浮かべた方が、他者との親しさを高く評価していることが明らかとなった。

他者に出来事が起こる以前の他者の幸福状態

回答者の性別と3つの気持ちを独立変数とし、出来事が起こる以前の他者の幸福状態を従属変数として分散分析を行った結果3つの気持ちに主効果が見られ、回答者に経験される気持ちと出来事が起こる以前の他者の幸福状態に関連があることが示された（ $F(4,144)=9.32, p<.001$ ）。同様の多重比較の結果（表3参照）を検討したところ、「良い気持ち」を経験した場合、良い出来事が起こる以前の他者の幸福状態をふつう程度かやや不幸と評価し、また「嫌な気持ち」や「複雑な気持ち」を経験した場合には、やや幸福な状態と評価していることが明らかとなった。

他者に出来事が起こる以前の自己の幸福状態

回答者の性別と3つの気持ちを独立変数とし、他者に良い出来事が起こる以前の回答者自身の幸福状態を従属変数として分散分析を行った結果、3つの気持ちの主効果が見られ、経験された3つの気持ちによって他者に良い出来事が起こる以前の回答者自身の幸福状態が影響されていることが明らかとなった（ $F(4,186)=16.82, p<.001$ ）。同様の多重比較の結果（表3参照）より、「良い気持ち」を経験している場合には、他者に良い出来事が起こる以前に、回答者がふつうまたは幸福な状態と評価されている一方、「嫌な気持ち」や「複雑な気持ち」を経験している場合においては、不幸な状態と評価されていることが明らかとなった。さらに、性差は有意ではなかったものの、男性が女性よりも、「良い気持ち」を経験している場合には自己が幸福な状態、「嫌な気持ち」を経験している場合には不幸な状態というように、経験される情動によって自己の幸福状態についての評価が影響されやすいことが分かった。

以前の他者および自己の幸福状態のバランス

経験される気持ちと他者に良い出来事が起こる以前の他者および自己の幸福状態それぞれとの関係については上で明らかになったが、他者の幸福状態と自己の幸福状態のバランス、つまり、出来事が起こる以前に他者と自己のどちらがより幸福であったか、または、どちらがより不幸であったかということと経験される情動の内容が何らかの関連を持つのかについて、また、回答者の性別による影響について明らかにするために、回答者の性別と3つの気持ちを独立変数とし、他者の幸福状態の評価値から回答者自身の幸福状態の評価値を引いた差（他者の幸福状態－自己の幸福状態）を従属変数として、被験者間要因と被験者内要因を含む2元配置の分散分析を行った。

その結果、3つの気持ちに主効果が見られ、経験される情動によって他者と自己の幸福状態のバランスが異なることが明らかとなった（ $F(2,134)=12.6, p<.001$ ）（図4参照）。「良い気持ち」を経験した場合、他者に比べて自己がより幸福であると評価されやすく、「嫌な気持ち」と「複雑な気持ち」を経験した場合には、自己よりも他者がより幸福であると評価されやすいことが明らかとなった。有意な性差はなかった。

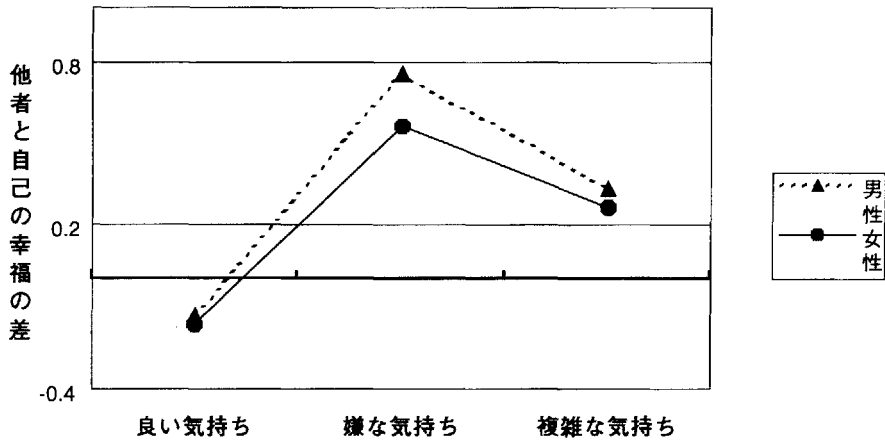


図4 自分と他者の幸福の差と各気持ちの関係

(幸福の差〈y軸〉の値は大きいほど他者が幸福であることを示す)

出来事の自己にとっての意味

回答者の性別と3つの気持ちを独立変数とし、他者に起こった出来事が回答者自身にとって持つ意味を従属変数として分散分析を行った結果、3つの気持ちの主効果が見られ、3つの気持ちによって他者に起こった出来事の回答者にとって持つ意味が異なることが明らかとなった ($F(4,187) = 37.05, p < .001$)。「良い気持ち」を経験した場合では、他者に起こった良い出来事が自己にとってあまり重要でなく、自己自身に起こることを特に望んでいなかった出来事と評価されることが多く、また「嫌な気持ち」を経験した場合には、他者に起こった良い出来事を自己自身に起こることをかなり強く望んでいたような、自己にとって重要な意味を持つ出来事と評価されていることが分かった (表3 参照)。また、「複雑な気持ち」を経験した場合は他者に起こった出来事が、自己が自分自身に起こることを望んでいた出来事と評価されやすいことが明らかとなった。

考 察

本研究では、他者に良い出来事が起こったときに、その出来事に直接利害関係のない第三者が経験する「共感的喜び」や「妬み」の発生について、その実態を明らかにすること、またそれらの情動の発生に関わる状況的な要因を、“自己と他者との関係性に絡むもの”と“出来事の性質そのものに絡むもの”の二種に分けそれぞれ想定し、それらの要因が経験される「共感的喜び」や「妬み」といかなる関与を示すのか、その詳細を明らかにすることを目的とした。

結果より本研究では、日常の中で他者に良い出来事が起こったとき、共感的喜びや妬みと言い換えられる情動が実際に経験されていることが確かめられた。3つの気持ちを経験したエピソードの多くに他者として「友人」が挙げられたのは、研究対象者が20代前後の学生であり、日常生活で友人と共有する時間が多いためと考えられる。挙げられたエピソードの内容は、中学・高校時代といったかなり前のものが多く、経験を想起させたときに現在やつい最近の出来事よりも、

多感な思春期で経験された出来事をより鮮やかに思い出していることが伺われた。受験での「合格」や部活動での「活躍」などは中学・高校時代において特に重要な出来事と考えられるだろう。

経験されたそれぞれの気持ちは、その多くが筆者の提起した「共感的喜び」や「妬み」と一致するものであった。特に女性において「(友人だけ幸福になって) ずるい」、自分ではなく他者が幸福になったことについて「むかつく」といった怒りを示す表現が見られたことから、ネガティブな情動をどのように経験するかについては性差がみられる可能性を感じた。

また、情動の生起に他者との立場関係や親しさ、他者および自己の幸福状態や、出来事の自己にとっての意味といった状況的な要因が密接に関連していることが明らかとなった。

他者との立場関係と親密度

本研究から、自己と他者との関係性にまつわる要因について、全ての要因が経験される情動に関与していることが明らかとなった。他者が目上か親しい場合に他者の良い出来事に対して共感的喜びを経験していること、また他者が対等や目下か親しくない場合に妬みを経験していることがわかった。他者の幸福を共に喜ぶことが出来るのは、やはり情動を経験するまでにポジティブな対人感情が形成されていると考えられる、心理的距離が近い親しい他者であるようである。また、バランス理論において、他者と親しいという正の関係性を均衡に保つために、他者の幸福をポジティブに受け入れるとも考えられるのではないかと。また、目上の他者に共感的喜びを経験しやすいのは、目上の者が対等や目下の者と比べて、尊敬や憧れの対象といった比較相手になり得ない存在に位置づけられている可能性が高いためと考えられる。また、同世代よりも上の世代の人が成功すれば、自分自身にもその成功が順を追ってやってくるのではないかという期待感が含まれるため、特に大きな満足を感じることが明らかにされている (Brickman & Bulman, 1977)。このことは年齢のみならず、立場関係において上位にある者に対しても同様に当てはまることが予想されるだろう。

自己および他者の幸福状態とバランス

結果において、経験される気持ちと出来事が起こる以前の他者および自己の幸福状態が関係することが示された。調査における出来事が起こる以前の他者の幸福の程度は、回答者自身の判断によるものであり、実際他者が回答者の評定通り幸福かどうか分からない。しかし回答者の情動経験によって自分から見て他者が幸福かどうかについての評価が異なり、情動経験に際して重要なポイントとなっていることが分かる。さらに回答者自身の幸福状態も密接に関連している。自分が不幸でも他者の幸福を心から喜べる人もいるだろう。しかし結果からは、他者の幸福を喜ぶときは自分が幸福であるという前提を必要とする傾向を多くの人が持っていることが伺われた。

出来事の意味

共感的喜びを経験する場合には、他者の良い出来事が自分にとって無関係の出来事であることの必要性が明らかとなった。これは社会的比較過程において比較の対象が、元来、個人の大切な目標や標準に直接関連している場合に、特に妬みが経験されやすいことに一致した結果であろう。

他者に起こった出来事が自己の利害に直接に絡まない状況であっても、多くの場合、人は、他

者や他者に起こった出来事を自らに引き寄せて、自己との関係性や自己とのバランス、自己にとっての意味などを無意識の中で判断・評価した結果、情動を導き出していると言えるだろう。

今後の研究課題

以上、この研究において、他者に良い出来事が起こったときに人々が「共感的喜び」や「妬み」に対応する情動を実際に経験していることが確かめられ、また「共感的喜び」と「妬み」の発生に関わり得る状況要因を、自己と他者との関係性および出来事そのものの特質という二種に分けて明らかにした。仮説的に想定されるに留まっていたこれらの要因を、本研究において体系的な形で明らかにしたことは意義のあることであろう。

しかし、非当事者によって経験される共感的喜びや妬みの経験には、本研究で想定した以外の多くの状況要因の関与も可能性として当然考えられる。本研究のエピソードについての記述回答の中では、特に記述を指定したわけではないのに、他者がいかにして成功や達成を手にしたか、他者の良い出来事の原因帰属についての言及や、また、回答者自身が長い期間他者を応援していたり、相談に乗っていたという他者の良い出来事と自己との関連についての言及が多く見られた。これらの他者の出来事の原因帰属や出来事と自己との関連の有無などは、情動を経験する際に関わってくる重要な状況要因と考えられる。これらの要因を含め、今回言及しなかった良い出来事が起こる他者の性別など他の状況要因についても詳細に見ていく必要があるだろう。

また、今回は第一段階として、共感的喜びや妬みに関わる状況要因に限定して研究を行ったが、三項関係情動についての研究は全般的に希薄であるため、状況要因のみならず、個人が特性として持つ人格や感情傾向といった個人内要因の関与についても明らかにすること、さらに状況要因と個人内要因の交絡など統合的にその詳細を明らかにしていくことが必要であるだろう。

本研究は、他者に良い出来事が起こるという場面において経験される第三者の情動経験について焦点を絞った。今回の研究で明らかになったことは、三項関係情動の4タイプのうち2タイプの情動に関するものである。我々が経験している三項関係情動全般について明らかにしようとするとき、残りの2タイプ（共感・共感的苦痛とシャーデンフロイデ）に相応する、他者に悪い出来事が起こる場面において経験される第三者の情動経験についても調査する必要がある。

さらに、妬みは元来、ネガティブ情動として捉えられてきたが、他者の持つリソースや利益について自己他者間のバランスを保とうとする働きをもち、結果的にそれが長期的な対人関係の継続に貢献するという生物学的な機能を持つ情動である。また、共感的喜びは人の凝集性や親密性に寄与している可能性が高く、人間生活に重要であり社会的に意味のある情動である。このように短期間の対人関係だけに留まらず、三項関係情動の生物学的および社会的機能についても考察する必要性があるだろう。

最後に方法についての課題として、質問紙における問い方は改良改善また工夫すべき点が多い。以後の研究では、こうしたことを課題として考慮しながら、三項関係情動の全体像を明らかに出来るよう取り組んでいきたい。

謝 辞

本論文の作成にあたり、京都大学大学院教育学研究科の遠藤利彦先生はじめ、ご指導いただきましたみ

なさまに深く感謝いたします。

文 献

- Brickman, P., & Bulman, R. J. (1977) Pleasure and pain in social comparison. In J. M. Suls & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives*. Washington, DC: Hemisphere.
- Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition and Emotions*, 6, 169-200.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. Wiley.
- Izard, C. E. (1991). *The psychology of emotions*. New York: Plenum Press.
- Smith, H. R. (2000). Assimilative and Contrastive Emotional Reactions to Upward and Downward Social Comparison. In Suls & Wheeler (Eds.), *Handbook of Social Comparison: Theory and Research*. New York: Kluwer Academic/ Plenum Publishers.
- Tesser, A. 1991 Emotion in social comparison and reflection processes. In J. Suls & T. A. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

(博士後期課程 1 回生, 教育方法学講座)

(受稿2004年 9 月 9 日, 改稿2004年11月19日, 受理2004年11月30日)

The empirical examination into the basic mechanism of experiencing “triangle emotions”:
Especially focusing on the situational determinants of empathic joy and envy

YAMAMOTO (NISHIZUMI) Ryoko

For past few decades, many psychologists have been keenly interested in human emotions. Recently, a lot of special attention has been paid to the emotions that people experience when they aren't directly related to some events in terms of their own interests. In daily life, we often experience some emotions as observers when some events happen to others and not to ourselves. How might you feel if you heard of your friends', your parents' or your rivals' good news? You might be delighted with it, or you might be envious of it or occasionally, you might have some ambivalent and complicated feelings. In this study, we focused on the emotions that people experience when some good events happen to others, i.e. “triangle emotions” (the emotions occurring in the triangle of self, other, and event). We constructed original questionnaire items and by using them asked 348 college students (average age: 19.8, males 172, females 176) to describe and rate about the three kinds of triangle emotions (empathic joy, envy, and ambivalent/complicated feeling) that they might experience if some successful events happened to someone around them and the characteristics of the situations that might bring about each emotion. As a result, we found that the qualities of such triangle emotions were related to the person experiencing the emotion, that person's relationships to the others, meanings of the events for themselves and the balance of well-being statuses between them and the others before the event-occurrences.